

十一面観音像 国宝

仏教の慈悲の女神と呼ばれることも多い十一面観音。この像は高さ1メートルで、平安時代（794～1185年）の初期の作である。観音は人々を病気から守り、食べ物や富を確保する手助けをされると考えられている。11の顔は様々な表情をしているが、一番大きな顔は慈悲と静けさを醸し出している。11個の顔の意味には諸説あるが、悟りに至るまでの道筋の10の段階を表しており、11番目の一番上についている顔が悟りを開いた状態を示している、という解釈もそのひとつである。

伝承によると、ガンダーラ（現在のアフガニスタンとパキスタンに位置する古代の国）の王が、観音を熱心に崇拝していた。夢の中で彼は、真の観音を求めるのであれば、日本の皇后を崇拝するように、と告げられた。そこで、彼は一人の仏教の教師を日本に派遣した。この教師が光明皇后（701～760年）をモデルとして3体の観音像を彫り、そのうちのひとつが法華寺に置かれている。

カヤの一木造りのこの像は、いくつかの点でユニークな仏像である。蓮の葉と花が交互に縁取りをなすこの像は、法華寺の創始者である光明皇后が蓮の池から足を踏み出そうとしているところを表しているとされている。右足には角度がつけられていて、大きな爪先は上を向いており、前に足を踏み出そうとしているかのようである。これはこの種の仏像にはほとんど見られない表現である。また、腕は長く引き伸ばされ、生き生きとした髪の毛は金属的な要素で装飾されている。オリジナルの像は通常は本堂の厨子の中に収められているが、年3回、一般公開されている。原寸大のレプリカが常時展示されている。